

IV 調査のまとめ

第3章 住民懇談会から見た課題

R7 (1) 「つながり」を広げることで地域における支え合いの基盤の整備を推進する必要がある

- 「つながりがあってよかったこと」については、自治会活動や地域イベント、子ども食堂、高齢者会食、サロン、ボランティア、趣味活動などの「集まれる場」が人と人を結びつけ、顔の見える関係を広げているとの意見が多く挙げられた。
- あいさつや見守り、日常の声かけを通じて信頼関係が育まれ、防犯や災害時の助け合い、困りごとの早期相談につながっている状況も確認された。
- 「話してみることで『自分だけじゃなかった』と思えた」「元気をもらえた」など、同じ悩みや立場を共有できることが心の支えとなり、生きがいや前向きな気持ちを生み出しているとの意見も多く示された。
- さらに、民生委員や社協、関係機関との顔の見える連携により、孤立を防ぎ、必要な支援につながる環境が形成されている点も成果として挙げられた。

「つながり」は単なる交流にとどまらず、安心感や支え合いの力を生み出し、地域における支え合いの基盤である。人と人が出会い関係を築ける「場」やきっかけを充実することにより、あいさつや見守り、支援機関との連携が自然に生まれる環境の整備をさらに推進していく必要がある。

R7 (2) 地域と連携して、「つながり」がない状況を生まない取組が必要である

- 「地域とつながりがない状況」については、人との関係が切れていることに加え、病気や障がいを知られたくない思い、介護や仕事による余裕のなさ、つながりを必要としない価値観など、体験や見聞に基づく多様な事例が挙げられた。
- プライバシー意識の高まりや人付き合いへの負担感、忙しさや心身の不調により交流が減少し、住民同士の顔が見えなくなっている状況が広がっている。
- その結果、相談先が分からず支援や情報に届かないまま困窮や悩みが深刻化するケースや、災害時に助け合えない不安も強まらつつある。また、地域活動の担い手不足や後継者不足により、祭りやサークル、子ども会などの活動が縮小・消滅し、出会いの機会そのものが減少しているとの懸念も示された。
- さらに、コロナ禍をきっかけとした会話の減少や防犯意識の強化が、あいさつや声かけを控える風潮を生み、孤立を一層加速させているとの指摘もあった。

「つながり」の希薄化により、孤独・孤立が進展し、支援につながりにくい状況が生じている。「つながり」の喪失は、地域の活力低下や生活環境の悪化にも影響を及ぼすため、地域住民と連携して孤立を未然に防ぐ地域づくりを進めていく必要がある。

R7 (3) 多様な手段により「つながり」が継続するような取組が必要である

- 「地域とつながりがない状況」をなくすための取組として、まず相談先や支援内容を分かりやすく「見える化」し、市報、回覧板、掲示板、ポスティング、SNS など多様な手段を活用して、必要な人に確実に届く情報発信を工夫することが重視されている。
- あいさつや声かけ、見回り、口コミといった日常の小さな接点を積み重ね、SOS を出してよい地域の雰囲気育てることが提案された。
- 食事会、体操、防災訓練、祭り、清掃活動、スポーツ、e スポーツ、散歩会など、楽しさや意義を感じられる活動や居場所を充実させ、多世代が自然に交わる環境づくりを進めることが提案されている。また、空き家や公共施設など地域資源を活用していく提案もある。
- 学校、PTA、福祉、医療、民生委員、地域包括支援センター、社協、CSW 等の連携を強化し、ヤングケアラーやひきこもり、生活困窮など支援が必要な人を早期に把握し、適切につなぐ体制づくりが求められている。あわせて、支援時のリスクや負担への配慮も指摘されている。

「つながり」を再構築するためには、「つながり」を「特別な活動」ではなく日常の中に位置付け、つながる間口を広げることが必要である。あわせて、情報発信、居場所づくり、支援の取組を一体的・横断的に行う、継続的な地域や社会への参加を支える仕組みづくりが必要となる。